

言語接触の観点からみた非有生名詞主語の「見る」構文 - 文語体コーパスを利用して -

高橋 暦 (名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士課程) †
堀江 薫 (名古屋大学)

Inanimate Subject Construction of Miru ('see') in Japanese from a Perspective of Language Contact - Through the Use of a Literary Style Corpus -

Koyomi Takahashi (Graduated School of Languages and Cultures, Nagoya University)
Kaoru Horie (Nagoya University)

1. はじめに

言語接触 (language contact) は語彙・文法の両面で言語の構造に大きな影響を与えることが広く知られている (Thomason and Kaufman 1989, Heine and Kuteva 2002)。日本語においては、言語接触は主として語彙の借用現象として観察され、古くは漢語、近代以後は英語から夥しい数の語を借用している (Loveday 1996)。

日本語における「動詞」の借用現象は、ドナー側の言語 (例: 英語) における動詞を一旦「名詞」として受け入れ、然る後に「する」を付与するといった形で日本語の語彙体系の中に組み入れていくというプロセスを経る。

(1) cut (英語動詞) → カット (名詞) → カットする (日本語動詞)

このような借用プロセスが非常に生産的であるのに対して、ドナー側の言語の動詞の意味・用法をモデルとして、既存の日本語動詞の新たな用法が生み出される(2)のような現象はあまり見られない。

(2) cut a deal (「取引を成立させる」) → *取引を「切る」

本研究では後者の言語接触現象の興味深い事例として、以下のような「見る」の意味・用法 (非有生名詞主語は角括弧、「動詞+目的語」は下線で示す) を取り上げる。

(3) 十一月の [米貿易収支] が大幅に改善をみたことから、..

(中日新聞 1988年1月19日)

(4) [受注指数] は同四〇・〇と、ともに二ケタ台の増加をみた。

(中日新聞 1993年11月18日)

(5) バブル崩壊後の [不良債権問題] が一応の解決を見て、..

(東京新聞 2006年5月16日)

この「見る」は、(I)基本義 (視覚行為) を希薄化させ、「出来事が出現する」といった意

† kym_tkhs@yahoo.co.jp

味を表す（動詞の問題）。また他に、(II)目的語には漢語サ変動詞の語幹（もしくはそれに相当する名詞）が選択されるといった特徴もある（構文の問題）。例えば、上記以外の「一致・合意・完結・進展（を見る）」などの漢語サ変動詞語幹に加え、「（高度・都市）～化（を見る）」などの複合名詞、「ピーク・インフレ（を見る）」といったカタカナ語まで目的語に立つことがある。これらの名詞は全て変化性を含意しており、これを満たすことが目的語として選択される条件となっている（ただし後者 2 タイプは特殊であり、基本的には前者の漢語サ変動詞語幹の名詞が選択される）。

この「見る」の用法については、「目的語+動詞（「見る」）」という単位でコロケーションの問題として扱う立場もあるが（村木（1991））、本研究では広く構文の問題として扱う。これは、この「見る」に(III)非有生名詞が主語に立つという特徴があるためである。具体的には、常に非有生名詞が主語に立つ訳ではないが、有生名詞よりも非有生名詞の方が当構文との親和性が高く、選択される主語の多くは非有生名詞となるのが特徴である。つまり、この「見る」は「非有生名詞主語の他動詞文」であり、日本語が「ナル型言語」であることを考えた場合、(III)は日本語の特徴に反することになる。

このように、当該の「見る」の用法についてはこれを構文として捉えることが妥当であると考える。そこでこのような分析の立場に基づいて、本研究では当該の「見る」の用法を「「見る」構文」と呼ぶことにする。

問題は、「この「見る」構文が、日本語固有の表現であるかどうか」ということである。本研究はこの問いに対し、外山（1973）、金田一（1981）を始めとする「日本語の他動詞文は非有生名詞を主語に取りにくい」とする主張のもとに、「非有生名詞主語の「見る」構文は、日本語固有の構文ではなく、(6-7)のような英語の視覚動詞 see の用法に基づいて発生した欧文脈である」という仮説を提示する。

- (6) [The year 1861] saw an increase of 49 per cent. in the number of burglaries and 56 per cent. in its cases of housebreaking. (*The Times*, Feb 20, 1863)
- (7) [The first day here] saw a sudden settlement of seven or more causes of considerable importance, ... (*The Times*, Aug 09, 1880)

(6-7)における see の意味用法は「見る」構文の持つ(I)~(III)のいずれの性質とも一致する。またこれ以外にも、日英両言語は、(IV)主に、新聞、専門雑誌などの書き言葉に用いられるという言語使用域 (register) 上の特徴を共有する。以上より、この種の see の意味用法を「見る」構文に対応するものとして「see 構文」と呼ぶことにする。改めて 4 点を整理する。

- (I) 基本義（視覚行為）を希薄化させ、「出来事が出現する」といった意味を表す。（動詞の問題）
- (II) 目的語には漢語サ変動詞の語幹（もしくはそれに相当する名詞）が選択されるといった特徴もある。（構文の問題）
- (III) 非有生名詞が主語に立つ。
- (IV) 主に新聞、専門雑誌などの書き言葉に用いられる。（言語使用域の問題）

しかしながら、これら 4 点については、「日英両言語でこれを共有する」と捉えるのではなく、現代語の確立期に当たる明治・大正期において多くの欧文的要素が日本語文章脈へ

と混入、融合した中で、英語 see から日本語「見る」へともたらされた諸特徴であると推認する。

以上を踏まえ、本研究は、上記仮説を検証するとともに、「見る」構文の和文脈化の過程を明らかにすることを目的とする。検証はコーパスデータに基づき行う。具体的に使用するコーパスは、(IV)の言語使用域に合わせた『太陽コーパス』(確立期現代語)、「Times Digital Archive」「BYU-BNC」(現代英語)、「中日新聞・東京新聞記事データベースサービス」(現代日本語)である。

2. 先行研究

2. 1 現代日本語に関する先行研究

現代日本語に関する先行研究には、村木(1991)、田中(1996)、高橋(2012 採録済)を取り上げる。

村木(1991)は当該の「見る」を機能動詞として捉え、先行名詞との結合により〈他動性の喪失〉が生じると述べる。またこのような働きは、機能動詞の中でも「見る」にだけ認められるものとして、「見る」を他の機能動詞と区別している。

田中(1996)は視覚動詞「見る」の多種多様な意味には、人間の認知能力を基盤とした有機的な連関があるとして、認知意味論の枠組みに基づいて「見る」の多義ネットワークを提案する。当該の「見る」は、この内「状況の経験、出現」の意味に分類されており、特に后者の「出現」の意味については「認知という対自的または対他的行為の側面も失う」と説明されている(pp.133-134)。統語的側面が分析の射程から外れているためか、「自動詞」「他動詞」といった用語の使用は避けられているが、田中(1996)についても村木(1991)に通ずる主張がなされていると考えてよいと思われる。

高橋(2012 採録済)ではこの種の「見る」に分析対象を限定し、構文そのものに非有生性が現れるとして、これを〈自動性の獲得〉であると述べた。またこの中では、目的語の表す〈人間関与〉の度合いが「見る」構文の有生・非有生性に連動すると主張した。

しかしながらこれらの研究は、議論を先述(1章)の(I)(II)に集約しており、本研究の主眼とする(III)や他の特徴である(IV)については言及していない。

2. 2 現代英語に関する先行研究

先行研究を見る前に、「Oxford English Dictionary Online」における「見る」構文に対応すると思われる see の記述を確認する。

(8) 10a: To know by observation (ocular and other), to witness; to meet with in the course of one's experience; to have personal knowledge of, to be a contemporary of and present at the scene of (an event); to be living at (a certain period of time)

(<http://www.oed.com/view/Entry/174749?rskey=kSq3zc&result=3&isAdvanced=false#eid>)

(視覚あるいはその他)の観察によって知ること、目撃すること；自分の経験の過程に遭遇する；(出来事に対する)個人的な知識を有する、あるいは出来事の場面に同時代的に居合わせる；(ある特定の時代に)生きている(筆者訳)

まとめると、当該 see のこの用法は「主体となる主語がその場に臨場し眼前の状況を経験すること」といった意味を表し、これを満たせば主語に有生・非有生の別を問わないものであると言えるかもしれない。またこの点で、非有生名詞が主語に選択される場合、それ

が母語話者に意識されるかされないかは別として、主語にはある種の比喩的作用が働いていると考えられる。この点については、『英語多義ネットワーク辞典』（瀬戸：2007）でも「擬人的用法」と言明されている。

次に、現代英語に関する先行研究として、国広（1967）、Langacker（2008）を挙げる。

国広（1967）は日英両言語の表現構造の相違の一つに非有生名詞主語表現を挙げ、「時」を表す表現の中に英語の視覚動詞 *see*（及び *find*, *witness*）を用いるものがあると述べる。

(9) [The succeeding days] saw the Talbots restored to peace and ease.

(O. Henry, *The Duplicity of Hargraves*: 国広（1967：153）

(10) [The early seventeenth century] saw the establishment of the present usage.

(G. L. Brook. (1958). *A History of the English Language*: 国広（1967：153）

英語の主語名詞は日本語では副詞節として処理されること、目的語は名詞句単独であるもの(9)と「動作名詞+of+名詞」の構造を有するもの(10)とがあることを述べ、対応する自然な日本語への翻訳規則を提示する。しかしながら、この中で日本語動詞「見る」との関連は指摘されていない。

Langacker（2008）は「Oxford English Dictionary Online」における上記に相当すると思われる *see* が非有生名詞主語を伴う場合について、これをセッティング主語構文（*setting-subject construction*）であると述べる。¹ 観察者としての人間は想起されるに止まり、言語表現上に明示的に表されることはないという。また、他のセッティング主語構文と同様、受動化も許容しない。

(11) a. [The stadium] has seen some thrilling contests.

b. *Some thrilling contests have been seen by the stadium. (Langacker. (2008: 389 (36a-b))

(12) a. [The last few years] have witnessed some major changes.

b. *Some major changes have been witnessed by the last years.

(Langacker. (2008: 390(37a-b))

さらに(11a)(12a)からも分かるように、主語の場所性は空間から時間にまで及ぶ。

国広（1967）が挙げる「動作名詞+of+名詞」（(9)the establishment of the present usage）型の目的語名詞句の用法は「見る」構文により近いものであり、本研究の仮説に対する根拠の一つとなると考えられる。しかしながら、「見る」構文との関連を明示的に指摘する研究は管見の限りはない。

¹ セッティング主語構文とは Langacker（2000）の用語で、通常(i)であれば（空間的・時間的な）場所句として表される名詞句（これをセッティング（*setting*）という。以下の Hilleman's latest novel がこれに当たる。）が主語位置に立ち取り立てられる(ii)のような構文のことをいう。他動詞構造を備えるが、主語名詞は出来事の参与者としては機能しないため構文は非他動的（*non-transitive*）となり、それに伴って受動化を許容しないという特徴を持っている。

(i) Hillerman features Jim Chee in his latest novel.

(ii) Hillerman's latest novel features Jim Chee.

(Langacker 2000:70(20a-b))

3. 「欧文脈」の定義

具体的分析に入る前に、「欧文脈」という用語を確認、規定しておく。欧文脈とは、「近代西欧語による文章表現（これを「欧文章」と呼んでおく）の要素で、明治時代にはいるまでの日本語による文章表現（これを「和文章」と呼んでおく）には見られなかったものを、日本語による文章表現に新しく取り入れた場合、欧文章からきた新しい要素」と定義されるもので（江湖山（1964：133）、名詞（抽象名詞主語、無生物名詞主語、抽象名詞目的語）、動詞（受動態、使役態、進行相、完了相など）、代名詞（人称代名詞、関係代名詞など）といった文法範疇だけでなく、句読点（及びそれに相当する要素（括弧や疑問符など）の使用といった表現技法にまで及ぶ。² いつ以降の表現かといった明確な区分はなく、明治初期から昭和初期の半世紀以上に渡って消長発展する文章脈として歴史性を持っている（木坂（1979））。³ 本研究では、以上に該当するものを欧文脈として捉える。

4. 『日本国語大辞典（第二版）』における「見る」構文の記述

次に、「見る」構文が欧文脈であるかどうかを検証する判断材料として、『日本国語大辞典（第二版）』により「見る」構文に相応する記述と初出を確認しておく。

(13) (二) 物事を経験したり、物事や人に対して身をもって働きかけたりする。

⑥ある行為・作用が実現する。

*女工哀史（1925）〈細井和喜蔵〉「冬季暖房のおかげで寒さ知らずに働けるに反し、夏季になって温度の上騰を見ることは甚だしい」

*後裔の街（1948）〈金達寿〉「それは、諸君の方が頑固なものだから今日まで実現を見られないだけだ」

（『日本国語大辞典（第二版）』第12巻（p.868）：下線は筆者による）

初出が大正末年（1925年（大正14））であることは、「見る」構文が欧文脈であるとする積極的な根拠とは言い難い。しかしながら、『女工哀史』（同）における他の「見る」構文には興味深い以下のような例(14)もあり、これにより仮説の妥当性が少なからず向上する。

(14) 十二貫にも足らぬ女工の〔身体〕は消失してなおマイナスを見る訳である。（p.375）

なおこの時期（明治後期から大正期）については、現代日本語の書き言葉が確立した時期であるとして「確立期現代語」と呼ぶことがある。確立期はその社会的要請から、漢語訳（英語を始めとする諸外国語の漢語による翻訳）の急増とそれに伴う新漢語⁴の出現が際立った時期であると言われている。

「見る」構文における(IV)主に新聞、専門雑誌などの書き言葉に用いられるという特徴は、書き言葉として摂取した see 構文が漢語訳を土台に、書き言葉としての「見る」構文へと翻訳、受容された事情がそのまま受け継がれた結果であると推察される。

² 欧文脈に見られる特徴の詳細は、森岡（1999）を参照。

³ 欧文脈の歴史的発展に関する詳細は、木坂（1979）を参照。

⁴ 「洋学の翻訳より生じたる漢語」（山田1958）を指す。

5. コーパスデータに基づく仮説の検証

本節では、コーパスデータをもとに、「見る」構文が欧文脈であるとする本研究の仮説の検証を行っていく。以降、『太陽コーパス』により得られたデータを「確立期現代語」、「中日新聞・東京新聞記事データベースサービス」により得られたデータを「現代語」、「Times Digital Archive」「BYU-BNC」により得られたデータを「現代英語」とする。

5. 1 確立期現代語の「見る」構文と現代英語 see 構文との類似

本節では、現代日本語の「見る」構文には見られない確立期現代語の「見る」構文と現代英語の see 構文との類似点を述べる。

5. 1. 1 「見る」構文の出自

本項ではまず、「見る」構文が既に明治期において見られたことをコーパスデータから明らかにする。⁵

- (15) [我外國貿易] が此の如き長足の進歩を見るに至りしは・・・ (『太陽』1895年2号)
- (16) [今年の上半季] は昨年の上半季に比して収入に於て實に三萬六千四百十七圓九十六錢乃ち三割二分強の増加を見る。 (『太陽』1895年8号)
- (17) 米國を始め葡萄牙、西班牙、露西亞の如きは減退したれども、他は概して増進せり、殊に[我邦]は最も著しき増加を見る、・・・ (『太陽』1895年10号)
- (18) 今や東京市民の宿題となれる[電車問題]は何等かの解決を見んとして居る。 (『太陽』1909年16号)

これらは意味や主語・目的語の特徴からみて、「見る」構文と言って差支えがないと思われる。従って、少なくとも1895年(明治28)の時点では「見る」構文が成立していたとみることができる。また同時に、『日本国語大辞典(第二版)』の記述も修正される。

5. 1. 2 主語について：主語の場所性

主語はいずれも非有生性名詞で場所解釈を可能とし、この点で see 構文に共通する。ただし確立期現代語の場合、現代英語ほど場所性が顕現せず、(15)「我外國貿易」、(17)「我邦」、(18)「電車問題」など、目的語の表す変化の主体とも解釈できるような抽象名詞が主語として選ばれる傾向にある。⁶

- (19) [主語で] [目的語を] [見る] → [主語が] [目的語する]
場所性 変化主体

現代語にはこの特徴が顕著であり、現代英語のように空間的・時間的場所として解釈可能な名詞が主語となる例は観察されない(1節(3-5)参照)。しかし確立期現代語においては、(10)のような時間的場所解釈を可能にする名詞句(あるまとまった期間を表す時間表現)が主語となることは少なくない。つまり、現代日本語にはない現代英語の特徴が、確立期現代語においては観察されるということである。

⁵ ただし『太陽コーパス』の性格上、1895年(明治28)より以前については探ることができない。

⁶ 主語の解釈は目的語の意味に依存的で、主語が変化の引き起こし手そのものとして動作主ないし経験者と考えられる場合もある。このことについては、高橋(2012採録済)で詳しく論じている(現代語を考察対象としているが、確立期現代語にも適用できるものである)。

さらに(16)については、「収入に於て（實に三萬六千四百十七圓九十六錢乃ち三割二分強の）増加」といった目的語が、国広（1967）の言う「動作名詞+of+名詞」型目的語の構造に近く、この場合、以下のように主語位置に立つ名詞を時間的場所として（角括弧〔 〕）、目的語を修飾する名詞を変化主体として（破線_____）解釈できるという類似点も見出すことができる。

(10) [The early seventeenth century] saw the establishment of the present usage. (再掲)

(16) [今年の上半季] は昨年の上半季に比して収入に於て實に三萬六千四百十七圓九十六錢乃ち三割二分強の増加を見る。 (再掲)

現代語にも類例は見られるが(20)、国広（1967）の翻訳規則の通り、主語位置に立つ名詞副詞節となって現れており（ ）、主語として解釈することは不可能である。

(20) 七十年代以降、電子製版による [カラー印刷技術] が長足の進歩を見た。
(中日新聞 1995 年 8 月 17 日)

以上、本節では、「見る」構文の出自を修正すると共に、現代語には見られない確立期現代語と現代英語との類似点を提示した。これは、確立期において see 構文から借用した「見る」の新規用法が、長い歴史変化の中で日本語独自の用法へと確立していったことの表れであると考えられる。またこれらは当仮説を支持する強い根拠となる。

5. 2 確立期現代語の「見る」構文と現代日本語の「見る」構文との差異

本節では、「見る」構文における確立期現代語と現代日本語の差異を明らかにする。また併せて、確立期現代語の「見る」構文においてのみ見られる特徴が、現代英語 see 構文において見られることを指摘する。

5. 2. 1 「見る」の表記のゆれ：漢字表記とひらがな表記

現代語において「見る」構文の「見る」は漢字だけでなくひらがなによっても表記される（1 節(3)など）。ひらがな表記の目的は、基本義（視覚行為）との差別化である。「見る」構文の場合、差別化を図るというだけでなく「視覚行為を表わさない」ことの強調とも言えるかもしれない。他方、確立期現代語において「見る」は全て漢字表記される。さらに「見る」以外に「視る」の使用まで観察される。

(21) 昨二十七年の臨時帝國議會及通常帝國議會へ [其處分法案] 御提出相成候得共成立を視るに至らざりしは・ (『太陽』1895 年 10 号)

(22) 此の [責任論] を以て第二の責任論とし、大に政府を攻撃せんとするが如し、然りと雖も [是れ] 亦未だ輿論の一致を視るに至らず。 (『太陽』1895 年 11 号)

一貫した漢字表記は、see という英語動詞を忠実に日本語に置き換えようという意識的な試みを示唆する。特に「視る」は、「視力・視察・凝視・注視」などの語からも分かるように「自らの視力により注意を払って見る」ことを表す語で、see 構文の持つ臨場性などと少なからず関わりがあるかもしれない。

また、公用文における補助動詞のひらがな表記は、事務次官等会議申合せ（1981 年（昭和 56））により取り決められたものであるが、このような補助動詞の表記事情が「見る」構

文における「見る」の表記のあり方影響を及ぼしている可能性もあり、この点については追加調査が必要である。

5. 2. 2 目的語について

「見る」に先行する目的語については、確立期現代語と現代語の間で確実な差異が見られる。1つは漢語サ変動詞語幹名詞の差異である。例えば現代語では「一致」「合意」「完結」「解決」「進展」などの語と共起しやすい傾向にあるのに対して、確立期現代語ではこの内「一致」「解決」のみ使用が確認され、「合意」「完結」「進展」に関しては1例も見られなかった（「一致」についても2例のみ）。

いずれの語も明治期（またはそれ以前）には既に存在する語であるため語自体の成立時期によって差異が生じるということではないようであるが⁷、現代語の共起語は「変化性を含意する動名詞」であることを基調としているのに対して、確立期現代語ではこのような制限がないこと、また確立期においては一定数見られた「蹉跎」のような共起語が現代語においては一切見られないことなど、確立期現代語との差異を明確に示している。また、「合意」「完結」「進展」などの語は、「見る」構文が構文として安定した地位を確保したのちに共起語となったもので、これらは言わば「見る」構文における新用法と見ることができる。共起語の推移については通時的分析を通じて再検討する必要があるだろう。

最後に、(23-24)のような作用や行為の結果生じた結果物を表す名詞が目的語に選択される例を見ておく。この種の目的語は確立期現代語にしか観察されず、現代語には一切見られない。目的語に選択される要件を、現代語の「見る」構文において「変化性を含意する動名詞」と規定するならば、確立期現代語の「見る」構文においては「変化性を含意する名詞全般」と言うことができるかもしれない。

- (23) 若し〔英國〕が、世の大勢を顧ることなく、頑迷に、労働者の團結を禁止するといふ法をとつてみたならば、何時の時代にか、恐るべき革命を見たかも知れないのである。
(『太陽』1925年13号)
- (24) 而して獨國の意向甚だ妙ならず、後竟に三國同盟を見るに至れり。
(『太陽』1895年12号)
- (25) the clearer it became that the EC could not, the less eager [the United States] was to see the alliance,...
(*Foreign Affairs*, Jul/Aug, 1994)

先述した通りこの種の目的語は現代語の「見る」構文には見られないが、(25)や2章(9)(12)のように現代英語の see 構文においてはしばしば観察される。むしろ現代英語 see においては、動作名詞を目的語に取る「見る」構文に近い用法よりも、このような用法のほうが自然かもしれない。⁸ see 構文との並行性を見る限り、確立期現代語における上記のような例については、現代語と乖離があるというのではなく、現代日本語の「見る」構文として定着しなかったと見る方が適当である。また現代英語 see 構文の中で一般的である用法が確

⁷ 近代語における語彙については、森岡（1991）および『日本国語大辞典（第二版）』を参照している。森岡（1991）によれば、確立期から既に「見る」構文の共起語として選ばれていた「一致」「解決」は新漢語である。成立時期が明治以降であることと新漢語であることとは似て非なることであり、この辺りについても検証すべきかもしれない。

⁸ この点で5.1節に含めるべきものであるが、目的語の性質という観点から本節5.2の中に組み入れ考察を行った。

立期現代語においてのみ見られ現代語には観察されないことは、本研究の仮説を支持する有力な証拠となる。

5. 3 まとめ

本研究では、「非有生名詞主語の「見る」構文は、日本語固有の構文ではなく、英語の視覚動詞 see の用法に基づいて発生した欧文脈である」という仮説を、以下4点から検証した。

(26)

- (A) 「見る」構文の出自の修正
- (B) 主語の場所性（確立期現代語と現代英語との類似）
- (C) 「見る」の表記方法（確立期現代語と現代語の差異）
- (D) 目的語について
 - a. 共起する目的語（確立期現代語と現代語の差異）
 - b. 作用や行為の結果生じた結果物を表す目的語（確立期現代語と現代英語との類似）

とりわけ (A) 主語の場所性、(D b) 作用や行為の結果生じた結果物を表す目的語については現代英語との連関を肯定的に指摘しうるものであり、これらにより本仮説は概ね支持されたものとする。

6 今後の課題

本研究の大きな問題点に、主語の扱いが挙げられる。本分析では主格標示の名詞も主題標示の名詞も一括して主語として捉えたが、両者を区別して分析することで主語性についてより詳細な分析結果を提示できるかもしれない。また、以下(27-8)のような受動用法についても考察に加える必要がある。

- (27) 基礎研究、医療、先端技術など、あらゆる分野で前世紀とは比べものにならない進展がみられた。(東京新聞 2000年12月26日)
- (28) 「…昨年度は三学期と比較して十一十五時間の授業時間に増加が見られた」とする反面、…(中日新聞 2004年9月15日)

「見る」構文における受動用法は、少なくとも『太陽コーパス』には実例が見当たらず、昭和以降の極めて新しい用法である可能性が高いことが分かっている。現代語における安定した使用を鑑みるとこのことは大変意外である。また先述の通り、現代日本語の書き言葉の多くは明治後期から大正期にかけて確立したと言われており、この点からも「見る」構文の特殊性を指摘できるかもしれない。

加えて「見る」構文は日英語にだけでなく他言語においても類例が見られている。とりわけ韓国語には「회의가 일치를 보다」(会議が一致を見る)など、日本語と同一の表現がある。またトルコ語にも「30度を見た」といった「見る」構文に通ずる視覚動詞の用法があるという。⁹「見る」構文が汎言語的に観察される場合、言語類型論的な観点から「見

⁹ この指摘は2011年9月17～18日に行われた認知言語学会第12回全国大会（於奈良教育大学）において、池上嘉彦先生に頂いたものです。またその際にトルコ・アンカラ大学のテキメン・アイシエヌール先生にもトルコ語の例文をご教授頂きました。両先生に改めて感謝申し上げます。

る」構文の再分析が可能である。

参考文献

- 江湖山恒明（1964）「欧文脈」『講座現代語 2 現代語の成立』明治書院, pp.131-153.
- 金田一春彦（1981）『日本語の特質』日本放送協会.
- Heine, Bernd, and Tania Kuteva（2005）*Language Contact and Grammatical Change*. Cambridge University Press.
- 木坂基（1979）「欧文脈の消長」『言語生活』335, pp.62-69.
- 国広哲弥（1967）『ELEC 言語叢書 構造的意味論—日英両語対照研究—』三省堂.
- 国立国語研究所（編）（2005）『太陽コーパス[CD-ROM]—雑誌「太陽」日本語データベース（国立国語研究所資料集 15）』博文館新社.
- Langacker, Ronald W.（2000）*Grammar and Conceptualization*. Oxford University Press.
- _____.（2008）*Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford University Press.（ロナルド・W・ラネカー（2011）『認知文法論序説』山梨正明訳. 研究社.）
- Loveday, Leo J（1996）*Language Contact in Japan*. Oxford University Press.
- 村木新次郎（1991）『日本語動詞の諸相』ひつじ書房.
- 森岡健二（1991）『近代語の成立〈語彙編〉』明治書院.
- _____.（1999）『欧文訓読の研究: 欧文脈の形成』明治書院.
- 瀬戸賢一（2007）『英語多義ネットワーク辞典（英語辞典シリーズ）』小学館.
- 小学館国語辞典編集部（2001）『日本国語大辞典 第二版 第十二巻』小学館.
- 高橋暦（2012 採録済）「日本語動詞「見る」における自動性の認知言語学的考察」『認知言語学会論文集』12, 認知言語学会.
- 田中聡子（1996）「動詞「みる」の多義構造」『言語研究』110, pp.120-142.
- Thomason, Sara G., and Terrence Kaufman（1989）*Language Contact, Creolization, and Genetic Linguistics*. University of California Press.
- 山田孝雄（1958）『国語の中に於ける漢語の研究』宝文館.

関連 URL

- Times Digital Archive: http://infotrac.galegroup.com/itw/infomark/1/1/1/purl=rc6_TTDA
- BYU-BNC: <http://corpus.byu.edu/coca/>
- 中日新聞・東京新聞記事データベースサービス: <http://www.cnc.ne.jp/ip/>

用例出典

- 細井和喜蔵（1925）『女工哀史』講談社.
- 金達寿（1948）『後裔の街』朝鮮文芸社.